查医生援鄂日记

Written by Zha Qiongfang
Compiled by Renji Hospital
Affiliated to Shanghai Jiao Tong University School of Medicine

Copyright © 2020 by Shanghai Jiao Tong University Press

First published 2020 by Shanghai Jiao Tong University Press, Shanghai.
This Japanese edition published 2020
by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo
by arrangement with Shanghai Jiao Tong University Press, Shanghai.

序文　査先生『湖北省支援日記』の力

陳　国　強
中国科学院院士
上海交通大学医学院院長

二〇二〇年、新型肺炎が発生してから今日に至るまで、全国において、四万二六〇〇人の医療チームが支援のため、湖北省に向かい、武漢市に赴いた。この二カ月間、私は、感動し、心配し、時には涙を流しながら、上海交通大学病院の湖北省支援医療チームを何度も見送ってきた。また、ウィーチャットのモーメンツを通して、湖北、武漢で「命を惜しまず」奮闘する湖北省支援チームの戦友たちに、ずっと関心を寄せていた。「去留す肝胆二つながらも昆侖[1]」「楼蘭を破らずんば終いに還らず[2]」というような、何事も恐れない精神力に、感動かつ感心せずにはいられなかった。そのチャットの中で、査瓊芳先生の『日記』を目にした。大晦日の夜に武漢へ発ち、三月三一日に上海に戻ってくるまで、一日も欠かさず綴ってこられたのだ。彼女の言葉は素朴で簡素だが、誠実で情け深いものがあり、実に感慨深く、涙がこぼれ落ちそうな時もあった。

査瓊芳先生は、上海が初めて送り出した湖北省支援医療チームのメンバーの一人で、このチームにおける上海交通大学病院所属の唯一の女医であった。大晦日の夜、家族と揃ってごちそうを食べているはずの彼女は、席を立ち、家族と離別した。その向かう先は、武漢市金銀潭病院だったのだ。それ

は、上海からの出発が最も早く、心の準備期間が最も短いチームであった。さらに、参考すべき経験が最も少なく、早期の防護物資が最も足りておらず、防護条件が最も整っていないチームであった。同時に、最も危篤な患者を救い、奮闘時間が最も長かったヒーローたちでもあったのだ。一月二五日未明の一：三〇に武漢天河空港に到着し、三月三一日に武漢市金銀潭病院の重症室での仕事が終わるまで、まる六八日を費やした！

査先生の『日記』を読むことで、彼女の周りにいる平凡かつ偉大な普通の人々の姿を目にすることができる。その中には、医療従事者もいれば、重症室で掃除を手助けしてくれるボランティア、ホテルのシェフ、ボランティア・ドライバー、宅配のお兄さん、患者さん、患者さんの家族などもいる。大げさな事件など綴ってはいない。あるのはただの日常である。だが、これらの普通の人々の日常によってこそ、中国の新型肺炎狙撃戦のロードマップが少しずつ描き上げられたのだ。最初は、医療従事者たちが厚くて重い防護服を身につけ、週に五〇時間働かなければならなかったが、のちに、より多くの医療隊が駆けつけてくれたおかげで、平常の休憩交替制に変わった。物資不足の時には、重症室に入る時だけN95マスクが配られていたが、医薬品・防護用品が十分に補充されてからは、いつでも、また適時使用することができるようになった。ＩＣＵが毎日足りないという状況もあったが、徐々に重症患者が軽症になっていき、続々と退院していった。三名の女医が、先が見えず互いに励まし合いながら夜勤をがんばり抜こうとしていたこともあったが、その後、難病や難病の疑いのある病例をめぐる対策会議が何度も開かれ、的を絞った治療ができるようになった。党中央のリーダーシップと大勢の人のおかげで、この偉大なる人民戦、総体戦、狙撃戦を、二カ月余りで、疫病のさらなる

拡散にブレーキを掛け、人類防疫史上の奇跡を作り上げることができたのだ。

査先生の日記は、中国中央テレビ、新華網などといった全国の数あるメディアに報道され、そこから伝わってきた希望と力が、まるで陣地で高く掲げられた旗が風になびいているようであった。それに惹きつけられて、湖北の支援に加わる医療従事者が次から次へと現れ、査先生の学生たちも次々と手をあげ、戦場に赴こうとした。そして、仁愛病院の第三回の整建制[3]の湖北省支援医療チームの一五六人は、二四時間足らずで早速集結したのである……。

現在、『日記』を書いた瓊芳先生ご本人を含め、上海湖北省支援医療チームの全員が、既に凱旋している。思わず傷を負ってしまった心も、時の流れによって癒されつつあり、その時への記憶も時代の移り変わりで忘れられることになるのだろう、と私は思うのだが、『日記』に書き記された数々の想いは、きっと、我々の記憶を蘇らせてくれることになるだろう。そして『日記』だけではなく、銘記されるべきことが、まだ数多く存在することも事実である。疫病発生時に、命を惜しまず、新型コロナとの戦いの最前線に身を投じていた湖北医療従事者の勇気を覚えよう。後方に立って故郷を守ってくれた医療者の昼夜兼行の奮闘ぶりを覚えよう。毎日スクリーニングの最前線に立っていた警察、コミュニティ担当者の辛労と貢献を覚えよう。また、仕事場を固く守る客室乗務員、トラック、バス、ないしボランティアのドライバー、宅配員……。

「歴史は、一番の教科書であり、目を覚ましてくれる一番の良薬でもある」。『査先生湖北支援日記』は、読み甲斐のある抗疫の史料であり、得がたい医学人文教育の書物でもある。医療従事者、そして中国のすべての人々が、中国共産党の力強い指導のもとにおいて、災難と危険を前に表れた大義、善

良、勇敢が、この日記によって再現された。また、このように私欲もなく何も恐れない精神によって、巨大なチャイナパワーが築き上げられた。この力があればこそ、我々に戦い勝てない困難、乗り越えられない溝はないと、信じる。

二〇二〇年四月一〇日

訳注

（1）原文は「去留肝胆両昆侖」、譚嗣同『獄中題壁』（一八九八）の中の一句。去る者と残る者が肝胆を相照らしており、まるで昆侖山のような気魄を持っているのだ、との意。

（2）原文は「不破楼蘭終不還」、王昌齢（六九八―七五六）『従軍行七首・其四』の中の一句である。敵を倒さなければ故郷には帰らない、との意。

（3）整建制とは、政府機関、軍隊、地方行政などあらゆる方面の関係をまとめたものを指す。

目次

序文　査先生『湖北省支援日記』の力 ……陳国強

二〇二〇年一月

25日　部署の在庫をかき集めてきた　3
26日　防護教育をもう一度、すべては安全のために！　8
27日　上海は私たちの強力な後ろ盾　11
28日　昨日、李克強総理が見舞いに来た　15
29日　愛を後ろ盾に、「晴々しい空」がいつかはきっと　17
30日　今日がいつだかわからないくらい忙しい　20
31日　人生初、マスクをつけたままで寝る　23

二〇二〇年二月

1日　ウイルスに情けはないけれど、人間にはある！　27
2日　上海医療チームによる初の気管挿管とECMO操作　29

3日　何日も奮闘して、一筋の光が見えた　32
4日　乗り越えられない冬はない　35
5日　ここで、チャイナスピードを目撃する　39
6日　社会全体が私たちを支えてくれている！　42
7日　防護服の下の私たちもきれい好きなのよ！　47
8日　いつも以上に家族を思う、元宵節に　51
9日　ラクダみたいな私　56
10日　ボランティア活動はメンタルストレスの解消法　60
11日　誰も諦めない、生きる見込みがなくても　64
12日　「上海方式」と故郷ハム、「二つの糧」をいただきました！　68
13日　抗疫前線にいても、やはり生活を愛している　72
14日　特別なバレンタインデー、愛の力を信じて！　75
15日　大雪の寒い武漢を、私たちが見守っている！　78
16日　悲しみの背後の無私と貢献に感謝したい！　81
17日　上海と湖北は共に長江の水を飲む仲間！　84
18日　疲れて声も出ない　87
19日　仁済チーム出征の日だ！　88
20日　『勇気』を聴きながら、春の花を待つ　90

21日 重症室に春がやってきた！ 93
22日 離れていても感じられる、家族の温かみ！ 96
23日 特別な「一カ月の祝杯」兼「誕生パーティ」 99
24日 今日のこの龍擡頭に、ウイルスよ去れ、中華に幸あれ、九州に福あれ！ 103
25日 最前線で新党員の入党を歓迎 107
26日 王辰院士が金銀潭病院病例対策会議に参加 111
27日 隔離病室での教育を行ったら、中度のぜんそく発作のようになった 114
28日 雷神山での結婚式がモーメンツで話題に 118
29日 患者は酸素マスクを外してまで医療従事者に「ハッピー・バースデー」と言いたかった！ 122

二〇二〇年三月

1日 あなたの顔を心に刻んで 127
2日 きっと、無事に医療チームを上海に連れて帰るよ！ 131
3日 医者ではないのに隔離病室に入っていく偉大な人たち！ 135
4日 なんでもできる陳教授 139

5日　啓蟄の日、祈願の日　143
6日　ごちそうの「虜」になった一日　148
7日　勝利への道のり　151
8日　あなたたちに春を届けよう　155
9日　「実家の人」に会った　159
10日　故郷の各界から「逆行の女性たち」への愛のリレー　163
11日　八〇％右肺圧縮の彼が全快して今日退院　167
12日　ボランティア・ドライバーたちに感謝したい　171
13日　『勇気』　174
14日　錦江からのごちそうはこれで三度目　178
15日　当初の緊張を忘れず、がんばり抜こう　183
16日　医学院の学生に抗疫前線の話をする　187
17日　「九〇年代生まれ」の責任感　191
18日　上海湖北支援医療チームが徐々に撤収開始　194
19日　暑い日がやってくるのが遅れるといいな　197
20日　勝利の前に、教訓と反省を　200
21日　同じ桜でもいろいろな趣がある　203
22日　握り締めた拳にこめた、ウイルスとの戦いに勝利する決心　208

23日 武漢、活動再開！ 212
24日 最も暗い時期を乗り越えた 215
25日 帰郷を前に、目の前の仕事に集中 219
26日 チームの患者がゼロになった 222
27日 私の心は誇りに満ちて 226
28日 帰る荷物の整理 231
29日 感謝の思いで大事なプレゼントを受け取った 235
30日 終生忘れ難いこの体験を、深く心に刻んで 239
31日 武漢に「命を懸けた」私たち 244

解説 ウイルス感染「戦火」の中からのデジタル報告 …… 羽根次郎 251

＊このたびの日本語版出版にあたり上海交通大学出版社の趙斌瑋氏の助力を得た。

武漢支援日記

コロナウイルスと闘った68日の記録

一月二五日　部署の在庫をかき集めてきた

一月二五日一時三〇分、飛行機はゆっくりと武漢天河（てんか）空港に到着した。着陸前は小雨が降っていたが、機内から出る時になんとやんだのだった。まるで何かの予兆のようだ。

一月二三日夜、病院から、湖北支援のために待機するようにと知らせがきた。二四日は陰暦の除夜で、大晦日のごちそうを食べかけのまま、すぐ武漢へ出発するよう命令を受けた。まるで、上の階の人のもう一つの靴が脱がされるのを待つようで[1]、宙ぶらりんになっていた心がやっと落ち着いた気持になった。荷物は既に整理済みだった。部署にある防護グッズの在庫を全部持っていくことになったが、それでもスーツケース一個分にしかならなかった。

虹橋空港四号口では、人々がひしめき合っていた。出征の「戦士」と見送りの上司たちで溢れていたのだ。「元気で帰ってきて」「体に気をつけて」という声の中、私たちはフライトナンバー、MU5000の飛行機に乗り込んだ。

離陸時間は二四：〇〇、去年とさよならをして、新しい年を迎える時だった。飛行機が飛び立つ時に新年のカウントダウンをするのは、私たちにしか経験できないことだろう。とどろく響きの中を、飛行機が空へ飛んでいった。こうして任務を背負った上海第一陣湖北支援医療チームは戦場に向かい、

戦いのラッパが鳴らされたのだった。医療チームのリーダーは、上海市第一人民病院副院長の鄭軍華（ていぐんか）教授、グループ長は周新（しゅうしん）教授だ。

一月二五日一時三〇分、飛行機はゆっくりと武漢天河空港に着陸した。着陸前は小雨が降っていたのに、なんと機内から出る時にはやんだのだった。まるで何かの予兆のようだが、この時の私たちはまだ何一つ知らない。これから向かう先のことも、支援する病院のこともわからない。空港バス三台で、私たちは武漢市金銀潭病院（以下「金銀潭病院」）から六〇〇メートル離れた万豪ホテル（Marriott hotel）に着いた。しばらく部屋で調整していると、一時間後に荷物と各自持ってきた防護グッズがホテルまで運ばれてきた。朝四時のロビーは依然として人の声で沸き立っていた。緊張したムードによって分泌されたアドレナリンが、みんなに疲れを忘れさせたようだ。

武漢の夜はとても寒かった。この時にやっと、これから金銀潭病院で仕事をするのだとわかった。みんなを十分に休ませるためにリーダーの鄭軍華さんが調整してくれて、午前は休憩して、午後一：三〇に会議を始め、仕事の手配をすることになった。

一月二五日一三時三〇分、会議は定時に開かれた。会場に行く途中でわかったことだが、ホテルから金銀潭病院の姿が見える。外に出ると、交通信号の色が変わっているだけで、広い通りはがらんとしていた。街頭にぶら下がっている赤い提灯だけから新年の気配を感じた。この日はまさに、新年の初日なのだった。

会議が始まった。すべての医療従事者が感染しないように、第一線に赴く前に、ハイレベルの専門的防護教育を受けなければならない、という鄭軍華リーダーの提案があった。今日、北京地壇病院感

染科の蔣栄猛主任より、新型コロナウイルス感染症の肺炎診療と病院の感染防止策が紹介され、また、中南大学湘雅病院の呉安華さんから、新型コロナウイルスの感染防止・コントロールについての説明があった。

講座が終わり、金銀潭病院のウイルス防止・コントロール状況を把握した鄭軍華リーダーは、金銀潭病院の張定宇院長を紹介してくれた。張院長が、病院の状況を説明し、患者の収容状況と治療方法、現状の問題などを話し、上海医療チームの到来に感謝と歓迎の意を表した。

次に、鄭軍華リーダーが、特別に建てた金銀潭病院の新しい病棟を紹介してくれた。四、五階は上海医療チーム、二、三階は陸軍部隊病院の管轄下に置くようになった。呼吸器などの設備がまだ不足しているため、病室はまだ主に軽症患者が対象で、明日の朝に病室での班と組の編成を手配することになった。

また、鄭リーダーが仕事の中の困難と突発事件について話してくれた。組織の建設を強化し、臨時党支部を設立し、初心を忘れず使命を銘記するように主張した(2)。物資の管理能力を向上させ、物資を計量し、管理を統一することを呼びかけ、原則として、物資を集中的に購入することを強調した。労働組合が医務組合からみんなへのサポートと、医療従事者の家族へのケアを徹底し、宣伝の仕事を強化し、仕事の経験と教訓を適時にまとめることを提唱した。

最後に、鄭リーダーがみんなを激励した。どんな困難も克服できる。勇気と難関を突破する決心をもって団結し、確固たる意志と高揚した闘志で戦場に向かわなければならないとのことであった。

鄭リーダーが言うには、第一陣湖北支援医療チームのメンバーとして、出発時に、各病院の指導者

たちが見送りに来てくれ、各放送局と新聞は皆のことを英雄だと思ってくれているそうだ。しかし、私たちは冷静さを保たなければならない。私たちはただやるべきことをやるだけだ。臨時党支部は、メンバー一人一人の思想状況に関心を持ち、思想教育をしっかりと行い、メンバー全員の精神状態を把握しなければならない、ということだった。

会議の最後に、国家衛生健康委員会の王賀勝（おうがしょう）副主任が見舞いに来てくれて、情熱に溢れた講演を行った。王主任は、自分を守る意識を持って、まずはよく休んで自分の体に気をつけること、自分を守ることができればこそ、患者によりよいサービスを提供することができる、と話した。さらに王主任は、上海医療チームに一つの目標を掲げた。戦いに勝利することはもちろんだが、科学的な治療を行わなければならないとのことである。ウイルスを前にして、医療チームが増えていくにつれて、それぞれの仕事も改善されていくだろうと述べた。私たちは自分に自信を持たなければならない。私たちには中国共産党のリーダーシップがあり、社会主義制度の政治的優位性を持ち、「全国を一局の碁に見立てる」[3]メリットがあるのだからこの戦いに勝つ自信はある、と励ましてくれた。

会議の後、鄭リーダーは会を設け、医療チームのグループ長とグループ長補佐と共に、次の計画と組分けのことについて話し合い、仁済（じんせい）医療チームは部屋に戻ることになった。戦略物資をチェックし、部屋で休憩して調整を行い、戦線の後方にいる私たちの病院と部署の上司に仕事を報告した。

夜、ビデオを見て、隔離、消毒、防護服の着脱のやりかたを勉強した。これからしっかり休んで力を蓄え、明日から戦場に立つ。

（1） “Wait for the other shoe to drop”というアメリカの民話から来ている。上の階で靴を一つ投げる音しかしなかったので、もう片方がどうなっているのか気になり夜も寝られず、もう一つの靴を脱いだ音がするまで待っていた、という話。

（2） 原文は「不忘初心、牢記使命」。二〇一七年一〇月習近平主席が中国共産党第一九回全国代表大会で提唱した。

（3） 「全国を一局の碁に見立てる」とは、中国の経済建設はまず国全体という大局から考えなければならないという重要指針のこと。鄧小平『前十年為後十年做好準備』が出典で、全国を一局の碁の盤面のように一体として統一的に計画し、相互に協力することを意味する。

一月二六日　防護教育をもう一度、すべては安全のために！

重症室にいる患者の病状は深刻で、侵襲的人工換気を必要とする患者が多いが、治療室に余分のベッドがないので、しばらく重症室にいてもらうしかなかった。防護措置をレベル3にあげたほうがいい。防護服の外に隔離服を重ねて着ることにする。

一月二六日午前九時、鄭リーダー、各グループ長、看護グループ長と感染科の先生が、金銀潭病院へ様子を見に行き、残った私たち医療チームメンバーは、引き続き関係事項を勉強することになった。

一月二六日午後一時に会議が開かれた。鄭リーダーが言うには、入院して治療を受ける必要のある患者がたくさんいるので、みんなには早く仕事に参加してもらいたいそうだ。病院から上海医療チームに北楼の二、三階が割り当てられたので、私たちも早く仕事を始めなければならない。鄭リーダーの話によると、北楼の二、三階は規範的な伝染病の病室で、消毒と隔離措置には長けているとのことだ。二階は普通病室で、三〇名の軽症陽性患者を収容していて、投薬治療が中心だ。三階（以下「北三楼」）は簡易の重症ＩＣＵ（集中治療室）で、今は二七名の患者を収容しており、その中の一五名は非侵襲的人工換気[1]によって換気を補助する患者だ。三階にいる患者の病状は比較的深刻で、いつ気管挿管と気管切開をしてもおかしくないぐらいだったが、これらの操作はセンターＩＣＵで行わなくてはな

らない。ここの物資と設備がまだ不足しているからだ。基本的な防護措置は行き届いているが、まだ操作装置が備わっていないところもある。鄭リーダーは、まず自分をよく守るように言った。持ってきた物資は統一して使い、足りないものがあれば数えておくこと。医療チームには上海という強い後ろ盾があるから大丈夫、と話してくれた。

次の議事日程は三つに分けられた。それぞれ医師組の分担、看護組の分担、隔離服の着脱の実演と教育だった。そして会議終了後、今日担当することになったスタッフたちは、職場につく必要があり、防護服の着脱を金銀潭病院の関係者が手伝い、隔離の作業をしっかり行うことになった。

医療チームのグループ長である周新主任から病室の状況が説明された。重症室の仕事はとても大変だそうで、治療室と呼吸器科の医師が必要だ。周新主任と陳徳昌（ちんとくしょう）主任は、重症室の様子を見にみんなを連れていくことになった。会議が終わった後、一〇名の昼勤の医師と三名の夜勤の医師がまず状況に慣れるようがんばってＨＩＳシステムの操作などを勉強することになった。重症室の状況が複雑なので、三日単位で勤務を交替し、また変化に応じて随時調整するとのことだ。周主任は、仕事時間、勤務交替の手続き、回診の制度などを説明し、防護作業をしっかり行うよう、さらに念を押していた。

医療チームの副グループ長である陳徳昌主任が、重症室の患者の状況を話してくれた。そこの患者の病状は深刻で、侵襲的人工換気を必要とする患者が多いが、治療室にベッドの余裕がないので、しばらくは重症室にいてもらうしかなかった。防護措置をレベル３にあげたほうがいい。防護服の外に隔離服を重ねて着ることになったが、これはエボラウイルスに相当するレベルだ。陳主任の話によると、飛沫と接触による感染の他、空気（エアロゾル）感染もあるので、防護には十分に気をつける必要

があるという。

次の看護グループからの報告も、依然として「防護」がキーワードとなっていた。

鄭リーダーは、いくつかの注意事項を強調した。①ウイルスに正確に立ち向かい、防護がとても重要である。物資は統一的に手配する。党を信じ、制度的優位性を信じ、どのような問題でもきっと解決できる。②上海メリットを発揮し、上海スピリットを発揚する。③科学的に対応し、特に医療安全に関心を寄せ、チームワークの精神と専門家が雲集するメリットを発揮する。④みんなが団結して互いに協力する。最後に、鄭リーダーは、ホテルの係員と金銀潭病院のスタッフを尊敬し、かれらの労働に敬意を払わなければならないと指摘した。気持を安定させ、現地の病院と現地の政府を信じる。私たちには明確な任務があり、そして私たちはその任務を安全に全うしなければならないのだ、とも話してくれた。

お昼は、ホテルの中華レストランのお弁当。立ったままで食事を取る人が多かった。これはちょっと苦しかった。

今日の教育と会議をまとめると、仕事は重く、安全は第一ということになる。私たちはなんとしても、任務を滞りなく達成しなければ！

（1）侵襲的人工換気は、気管挿管・気管切開などの人工気道を使う換気方法で、非侵襲的陽圧換気療法は、マスクなどを使用して機械的に上気道から陽圧をかけ、換気を補助する方法。